

X. 調査の成果と課題

1. 新屋敷遺跡C区の先土器時代

1. はじめに

大宮台地の先土器時代遺跡は、現在200箇所を優に超えており、発掘調査の件数も年々確実に増加し、台地全域に遺跡が立地する様相が、徐々に明かになってきている。しかし、北東部地域は加須低地を中心とした関東造盆地運動による台地の沈降が、遺跡の確認や発掘調査に重大な障害となり、発掘調査の主役が大宮台地の南部地域にある状況には変りはない。

鴻巣市は、地形図を見ると狭義の大宮台地の北東端、三角形の部分に位置している。1989（平成元）年に刊行された市史の資料編に、先土器時代の6遺跡が集成され、小形の国府型ナイフ形石器を出土した赤台遺跡、岩宿Ⅱ期の中三谷遺跡等と、新屋敷遺跡出土の尖頭器石器群が掲載され、本地域の様相が明らかになってきたが、いずれも小規模な遺跡であった。

新屋敷遺跡C区から検出された石器群は、岩宿Ⅱ期を主体に、市史に掲載された尖頭器と関連すると思われる石器群が少数と、縄文草創期の石斧、有茎尖頭器は単独であるが、複数の時期の石器が検出されている。

岩宿Ⅱ期は、石器集中6箇所と礫群10基が、埋没谷の谷頭を囲むように検出されている。石器の総数は569点、礫の総数は3595点と大宮台地全体でも、纏まった資料である。本遺跡の調査を基に成果と、それから求められる課題に関し検討する。

2. ナイフ形石器、切出形石器、角錐状石器

該期の石器群の特徴（イメージ）を簡単に述べると、横長（横広）剥片を多用した、多様な形態のナイフ形石器と角錐状石器、円形搔器、円刃搔器、等が挙げられることが多いと思われる。筆者も上記のようなイメージのもとに、該期の石器群を見てきたが、石器群の理解に最も苦慮しているのは、ナイフ形石器と切出形石器、角錐状石器の区分（理解）をどのように捉えて

行くべきかといった問題である。

3つの石器は、先土器時代研究の初期段階から注目され、編年的・系統的基準として、多くの先学達によって取り上げられ、議論が重ねられて来た石器であるが、研究者間の共通理解がどこまではかれているかは、別問題として残っている。

角錐状石器は、ゴロゴロ石器、舟底様石器、尖頭器様石器、等と幾つかの名称で呼ばれてきた。それぞれの呼称によって、石器群の捉える範囲が若干異なっていた。現在は、角錐状石器の用語が最も使われているが、ナイフ形石器、切出形石器等を含めて、研究者毎に石器の分類のしかたに若干の違いが見られる。

そこで、各石器の最初の定義を確認することを手挂かりに、3つの石器の整理を試みることにする。

【ナイフ形石器・切出形石器】

ナイフ形石器、切出形石器はともに芹沢氏によって提唱された名称である。この2つの石器の最初の定義を、織笠明子氏は1982年の神奈川考古同人会主催シンポジウムで、芹沢氏（1954年）の論文から、素材、調整加工の部位、調整加工の種類、石器の形状の4つの要素に分けて比較した。その後の切出形石器の捉え方の変遷は、ナイフ形石器の一形態、ナイフ形石器と異なる形態、台形石器の一型式とする3つの考え方に整理している。

近年、伊藤氏は切出形石器に関し、各人の論文に掲載されている石器実測図を比較し、その「適用範囲」を検討するなどし、新しい視点として「切出形石器」を提唱した。「切出形石器をナイフ形石器の一形態とせずに、ナイフ形石器と対峙させるかたちで論じた方が有効である」として、切出形石器をナイフ形石器に含めない点は賛同できるが、該期の資料を「全て切出形石器とすべき」とした考えか方には疑問がある。

現状では、切出形石器をナイフ形石器の一形態と考

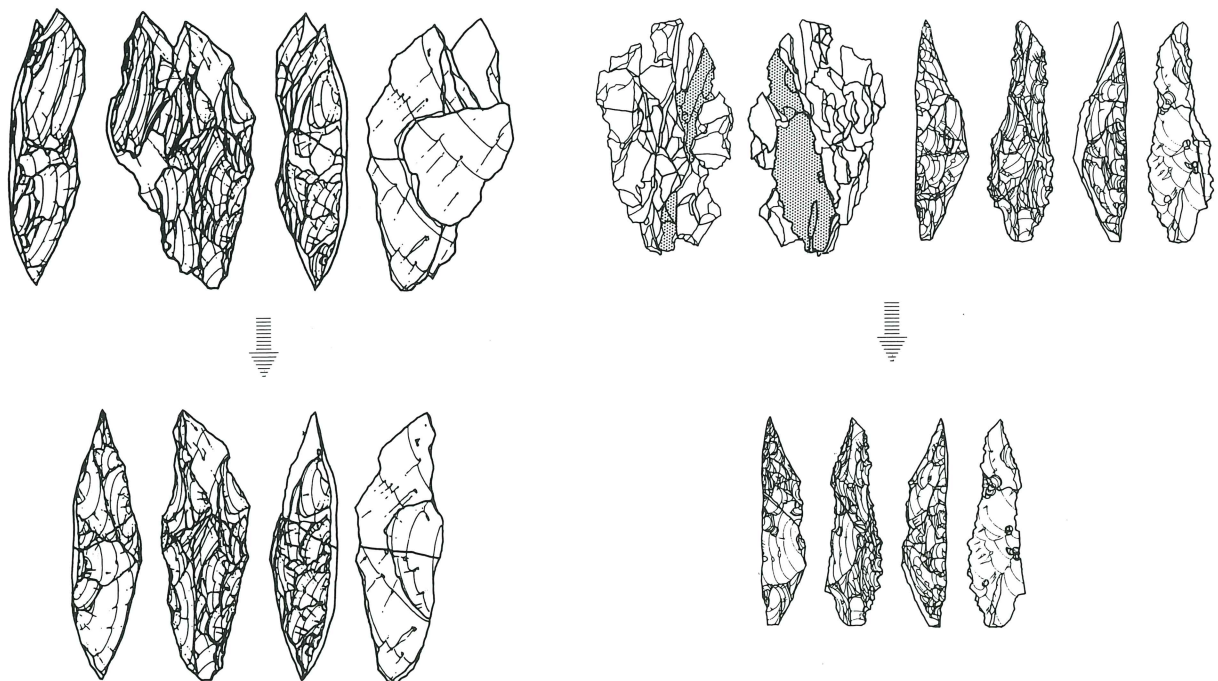
える方が主流と思われるが、研究者によって「適用範囲」が微妙に異なっているようである。

【角錐状石器】

角錐状石器の最初の定義は、1968年に『古代吉備』3号に西川宏・杉野文一両氏が発表した「岡山県玉野市宮田山西地点の石器」で、「原材 lump から剥離された横長剥片を、片面（主要剥離面）だけ残して他の両側辺から細部加工し、一端を尖らせたもので、全体が三角錐乃至四角錐状を呈するものである。そして残された一面は、平滑で、未加工のままになっている。全体の作りが得に部厚く出来ていること、先端の尖り方は鋭くないこと、平滑な一面が残されていること等の特色を備えていることは、これを槍先とするよりも、むしろ他の用途を考えるべきであろう。芹沢長介氏はこのような形態の石器を、一応舟底石器のなかに入れてながらも、縦縞剥離 fluting のない粗製品であるので、調整具 fabricater ではなかろうかとしている。」としている。

角錐状石器の最初の定義の後、名称の問題も含めて、定義について関東地方での具体的論及は少なかった。

第320図 自由学園南・丸山東遺跡出土石器



自由学園南遺跡 (1987年調査)

丸山東遺跡

0 5cm

織笠昭氏は1987年「角錐状石器の形態と技術」のなかで形態の観察を行い「角錐状石器の特徴のひとつはその一端が鋭く尖っていること」としている。

以上、3つの石器に関する最初の定義と、その石器の捉え方の変遷を雑駁にみたが、現時点で全ての答えが出ているわけではなく、各研究者の中で今日的課題になっている問題でもある。

最後に筆者なりの考え方を整理し、以後の立場を明確にする必要があると思うが、考え方の整理途上でもあり、明確な表現ができないのも現状である。

まず、切出形石器とナイフ形石器は区分して考え、該期に特徴的な石器と考えている。ナイフ形石器は該期を通して、量の多寡は別としても、組成しているものとする。また、角錐状石器は一端が尖ることが最も重要な石器であったと考えている。

第320図の2つの石器は、報告書で角錐状石器およびその未成品と分類されているが、接合の状態を観察すると、両側縁から繰り返し剥離が施され、幅が素材の半分近くまで達するが、先端の幅狭の刃部を残している。さらに丸山東遺跡の場合、先端付近に再加工が

施されているが、尚且つ幅狭の刃部を残している。これは、先端の幅狭の刃部を意識し、一端を尖らそうとする意図とは別であると考えられ、角錐状石器ではなく、切出形石器として捉える方が妥当と思われる。3つの石器は、共通した素材と調整技術から作られており、個別に分類すると中間形態と言えるものが多い。そのため、各研究者による分類基準にズレが生じている。今後、難しい問題となるであろうが、この点の議論が最も重要になるものと思われる。

3. 大宮台地における黒耀石製石器群について

新屋敷遺跡C区から検出された、岩宿II期の石器群に用いられている石器石材の主体は黒耀石である。大宮台地の先土器時代遺跡で利用されている石器石材は、河川等によって比較的近在で入手できると考えられるガラス質黒色安山岩、黒色頁岩、チャートと、遠隔地から持ち込まれている黒耀石の2つのグループがあり、岩宿II期から砂川期に関して、前者を主体とする遺跡と、黒耀石を主体に用いる遺跡が認められる。他の台地では、遺跡の規模によって石材の多様性が見られるが、該期は小規模な遺跡が多いためか、黒耀石利用の偏在が一つの特徴として注目される。

大宮台地の該期の遺跡で石器点数が多く黒耀石を多用する大和田高明遺跡、明花向遺跡C区の石器と、新屋敷遺跡C区の石器群とを比較することにする。

大和田高明遺跡は、大宮市に所在する。文化層は2枚認識され、第II文化層が該期に相当する。石器集中は18箇所、礫群18基が分布を重複して検出された。石器はナイフ形石器95点を含む充実した内容で、黒耀石が石器石材の37%を占めている。

明花向遺跡C区は、浦和市に所在する。遺物は第IV層を中心として、石器集中4箇所と礫群4基が分布を重複して検出された。石器は424点(表採等の細石刃3点を含む)、礫は752点である。石器組成は、ナイフ形石器が主体を占め34点である。石器石材は主に黒耀石が用いられている。本石器群の編年的位置付けは、報告者の田中氏によって砂川期以降の近い時期とされ、

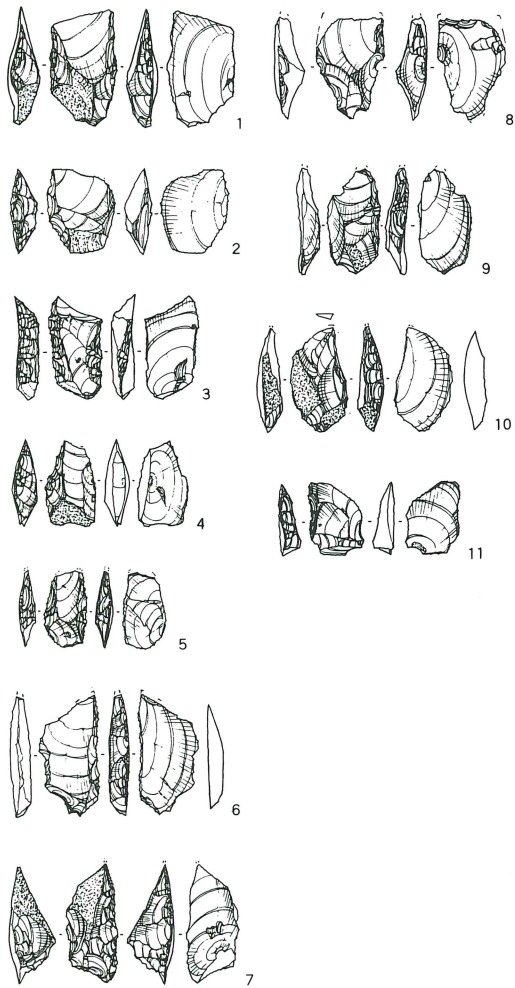
神奈川県深見諏訪山遺跡第III文化層、下九沢山谷遺跡第II文化層の石器群と比較検討された。それに対し、田村隆氏は礫群の特徴で砂川期以前に置く考えを提示している(註1)。砂川期を挟んで、意見が分かれるが、ここでは新屋敷遺跡C区と共通する様相が見られるため、検討対象として取り上げる。

第321・322図は、3遺跡を大宮台地の位置に合わせ左から新屋敷遺跡C区、大和田高明遺跡、明花向遺跡C区の順で並べている。第321図は、3遺跡から出土した切出形石器である。外形は長さ・幅の値が近く台形状のもの、縦長で幅狭の刃部となるもの等、形状に幾つかのバリエーションがある。横広の剥片を素材とするものも多く、両側縁は急角度の調整加工、折断、打面を残すもの等があり、基部中央部の横断面は方形状となる。刃部は器軸に対し直角方向に近いものが多い。

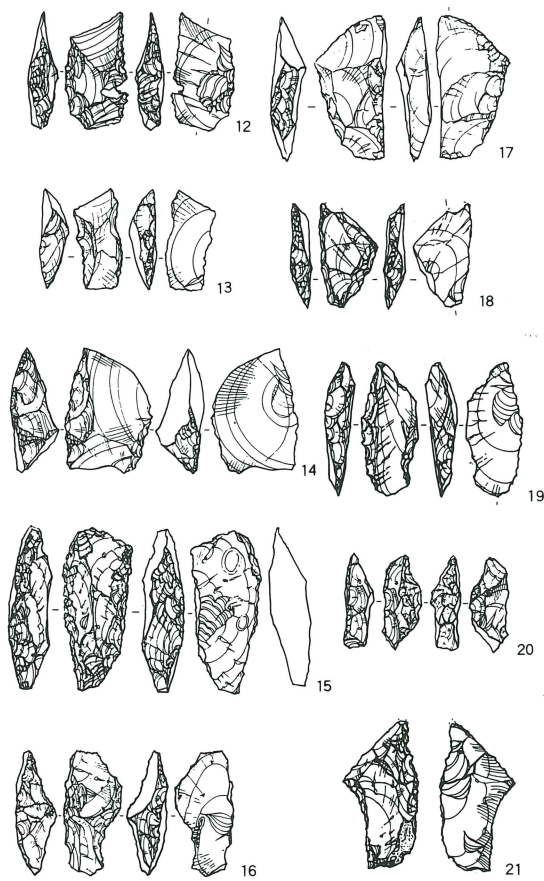
第322図は、1～19は縦長剥片を素材としたナイフ形石器である。新屋敷遺跡C区と明花向遺跡C区は、基端に打面を残し(明花向遺跡は幅広のものが多い)、調整加工は基本的に一側縁で、裏面に平坦剥離が施されている。一方、大和田高明遺跡の11は基端に打面を残しているが、裏面の平坦剥離と一側縁の調整加工を基本としていない点が異なっている。

角錐状石器(20～24)は、各遺跡で形状等が異なっている。新屋敷遺跡C区は小形で、外形が三角形になり基部の横断面は台形状となる。大和田高明遺跡は両側縁からの調整加工が基部の中央で交わり、稜線を作っている。横断面は三角形である。明花向遺跡C区は、両端が欠損し全体の形状は不明で、尖頭器の破損品の可能性が示唆されているが、横断面が三角形である点など、角錐状石器の破損品の可能性が指摘できる。

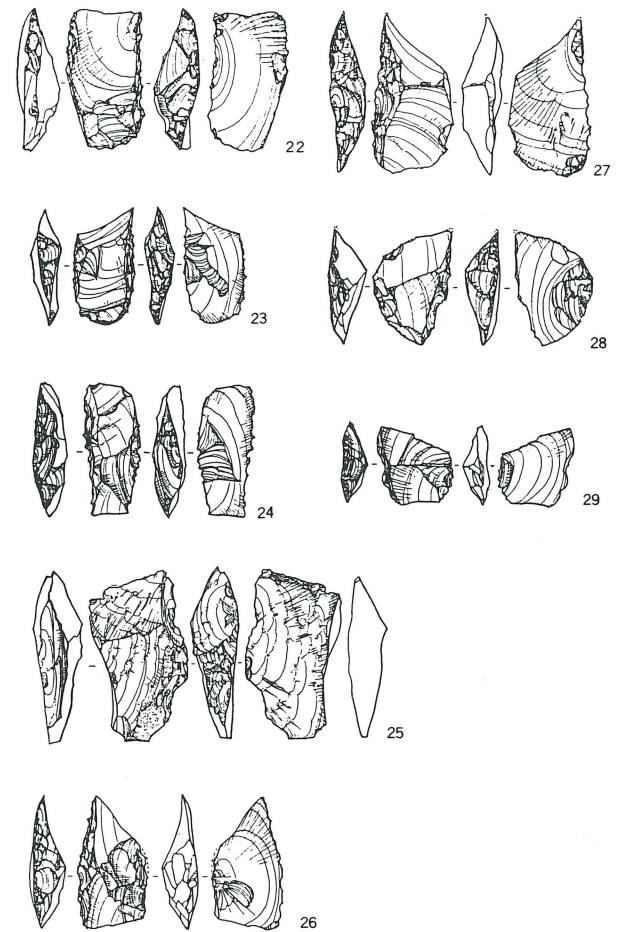
以上、切出形石器、ナイフ形石器、角錐状石器の3つ石器について比較した。新屋敷遺跡C区と明花向遺跡C区の石器群の間に、多くの共通性が見られた。また、大和田高明遺跡との間には異なる点が見られるが、全体としては近似した石器群であるといえる。



新屋敷遺跡C区

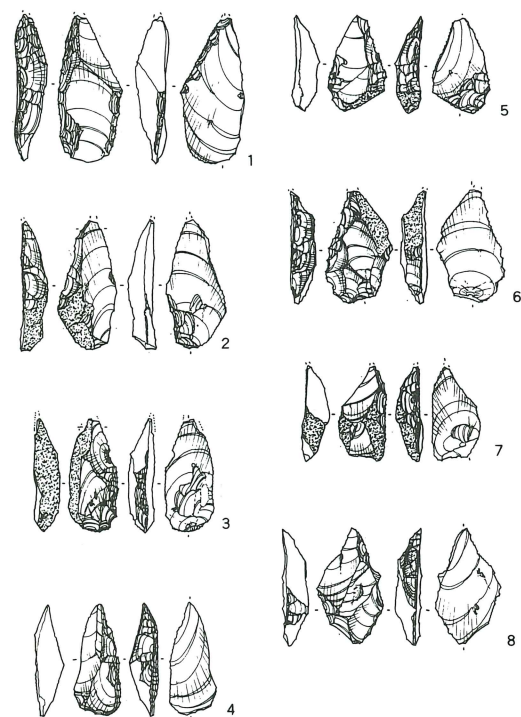


大和田高明遺跡

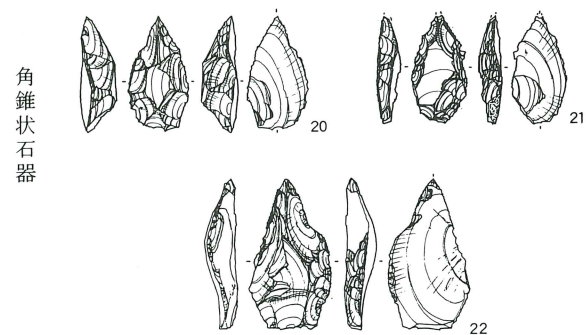
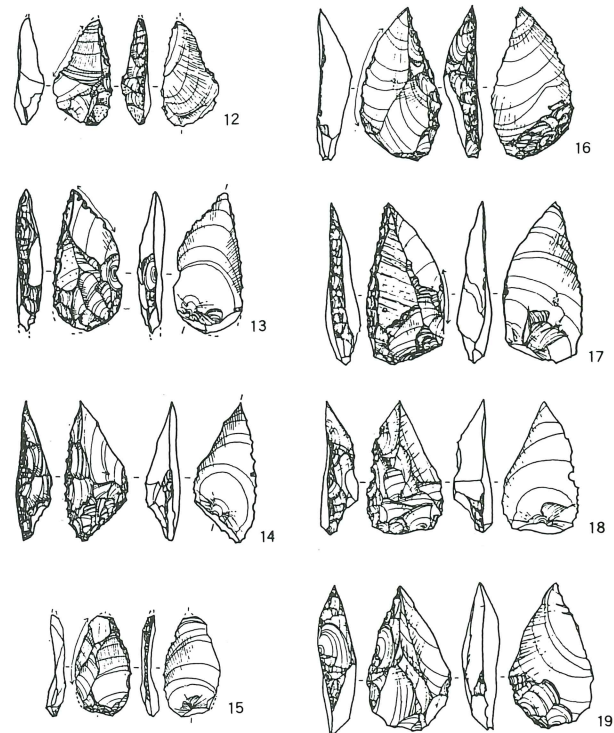
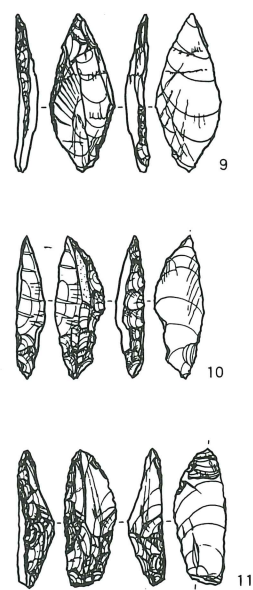


明花向遺跡C区（第IV層）

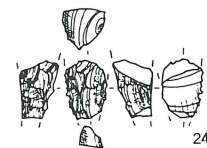
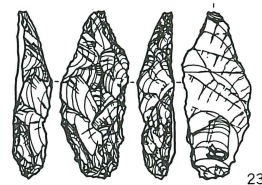
0 5cm



ナイフ形石器



角錐状石器



0 5cm

新屋敷遺跡 C 区

大和田高明遺跡

明花向遺跡 C 区 (第IV層)

4. 岩宿Ⅱ期の細分についての試論

岩宿Ⅱ期は、岩宿遺跡Ⅱ石器文化の資料をタイプサイトとする石器群として捉えている。該期は先土器時代研究で編年的位置づけ、石器群の系統の問題等、研究史的に重要な意味をもっており、また、今日的課題を有していると考えられる。

岩宿Ⅱ期の問題点として、多様な形態（器種）の石器群が、複雑に錯綜しているといったイメージと、野川遺跡の層位的所見と西日本の石器（国府型ナイフ形石器等）との関連が議論されてきた。また、近年特に該期の細分を積極的に行った論文が発表されている。本稿は、遺跡間での自然層位的対比による編年の枠組でなく、遺跡内での層位的見解を重視し、該期の複数文化層が認識できた遺跡を検討することから始めて、各期の概要の簡単な整理を試みる。

1) 岩宿Ⅱ期の文化層が複数検出された遺跡

各地域（台地）によって、ローム層に堆積状況が異なり、複数の文化層の確認に適した、相模野・武蔵野台地と比べ、堆積の薄い大宮・下総台地では自ずと分離が困難になる。しかし、自然層位での相対的対比ではなく、各遺跡における文化層の検討で上下差が認められる例は在る。自然層での比較ではなく、遺跡単位で該期の複数文化が確認された遺跡、近接する地点で異なった石器群がみられる遺跡を対象に検討する。

a) 柏ヶ谷長ヲサ遺跡（第323・324図）

神奈川県海老名市に所在する。遺跡は相模野台地の相模原面（武蔵野面）で、目久尻川の左岸に位置する。標高は現在の地表面で45～50m前後である。

先土器時代の資料は、13枚の文化層が確認された。内、関連する文化層はBB2U層～BB2L層にかけて検出された、第Ⅳ～Ⅺ文化層の6枚である。該期の石器群が、最も細かい文化層として認識できた遺跡で、該期の細分において骨子になる遺跡である。現在、資料提示は概要報告書と石器文化研究交流会での発表要旨のみで、正式報告書が待ち望まれる。

第Ⅶ文化層は、B2L上面から検出された。石器集中3箇所と礫群3基が重複して検出された。剥片石器類

の石器石材は、黒曜石、凝灰岩、安山岩等が用いられている。石器はナイフ形石器、搔器、錐器等が見られる。ナイフ形石器は剥片素材を横に用いたもの(1・2)、縦に用いたもの(3)があり、調整加工はいずれも鋸歯状になる粗いものと、通常の Blunting 状のものが見られる。搔器は刃部円形の形状の整ったものである。

第Ⅶ文化層は、B2L 上部から検出された。他の文化層と比較すると石器の数は60点と少ない。石器は細身の切出形石器と、石斧の未成品が特徴的である。石器石材は剥片石器は黒曜石、石斧の未成品には凝灰岩が用いられている。

第Ⅷ文化層は、B2L 上部から検出された。石器集中は8箇所、礫群と重複して検出された。石器の組成は報告書・発表要旨の分類で、ナイフ形石器、角錐状石器、彫器、搔・削器となっている。

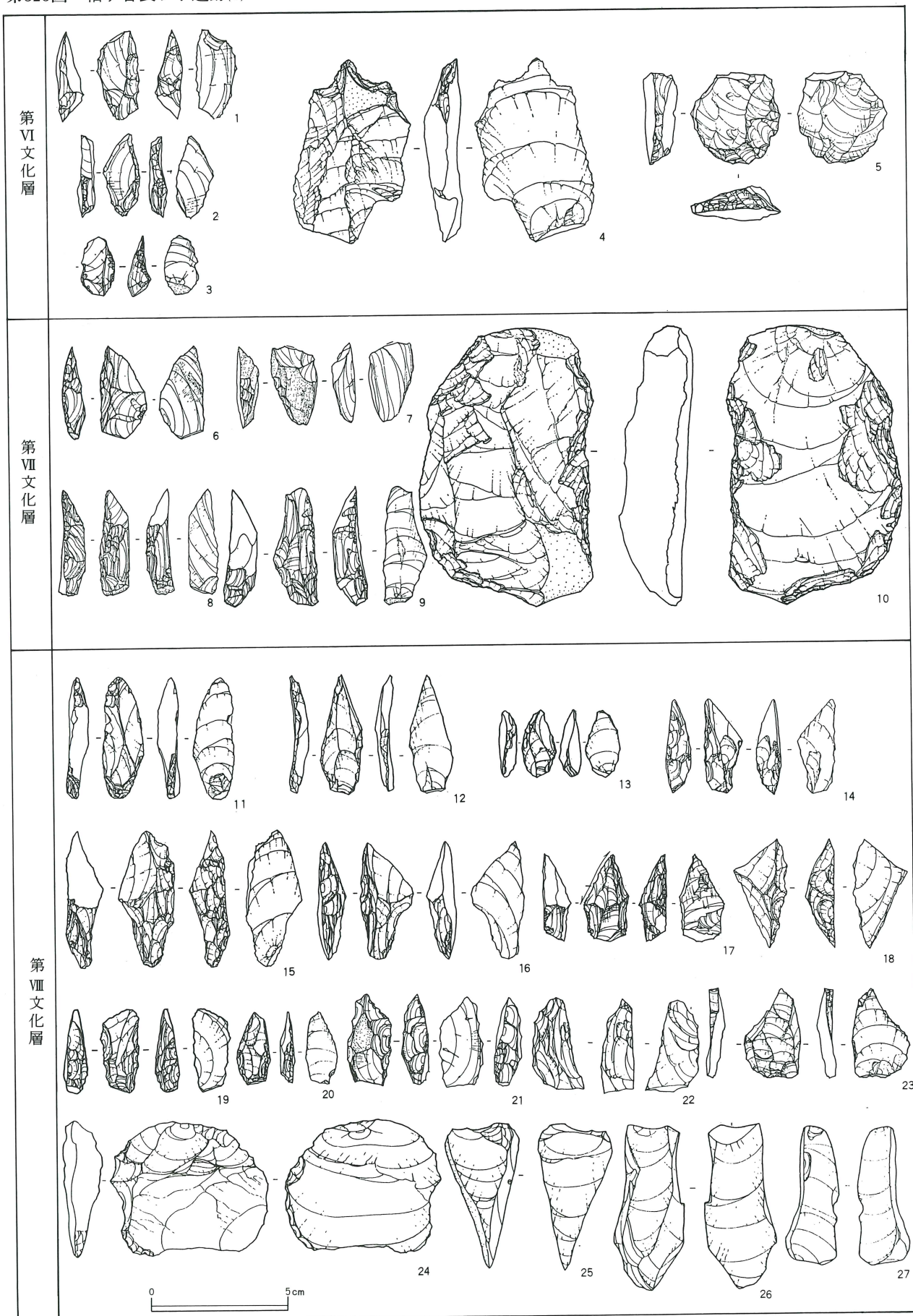
ナイフ形石器は、縦長剥片を素材に基端面に打面を残し、基端の周辺と先端付近に主に調整加工が施される(11～13)。厚手横広の剥片を横又は斜め方向に用いて、鋸歯状の粗い剥離加工が両側縁に施される(14～17)。厚手横広の剥片を横に用いて、両側縁が平行するように鋸歯状の調整加工を施し、幅狭の刃部が先端に見られる(19・20)に分類できる。(19・20)は切出形石器として、ナイフ形石器から分離できると考える。角錐状石器は、厚手横広の剥片を素材に、鋸歯状の調整加工が施される形状の整った(21)と、不整形の(22)がある。搔・削器は定形的なものは少ないようである。また、7号ブロックから検出された凝灰岩製の縦長剥片は興味深い。

剥片石器には凝灰岩を主体に黒曜石、安山岩が用いられている。

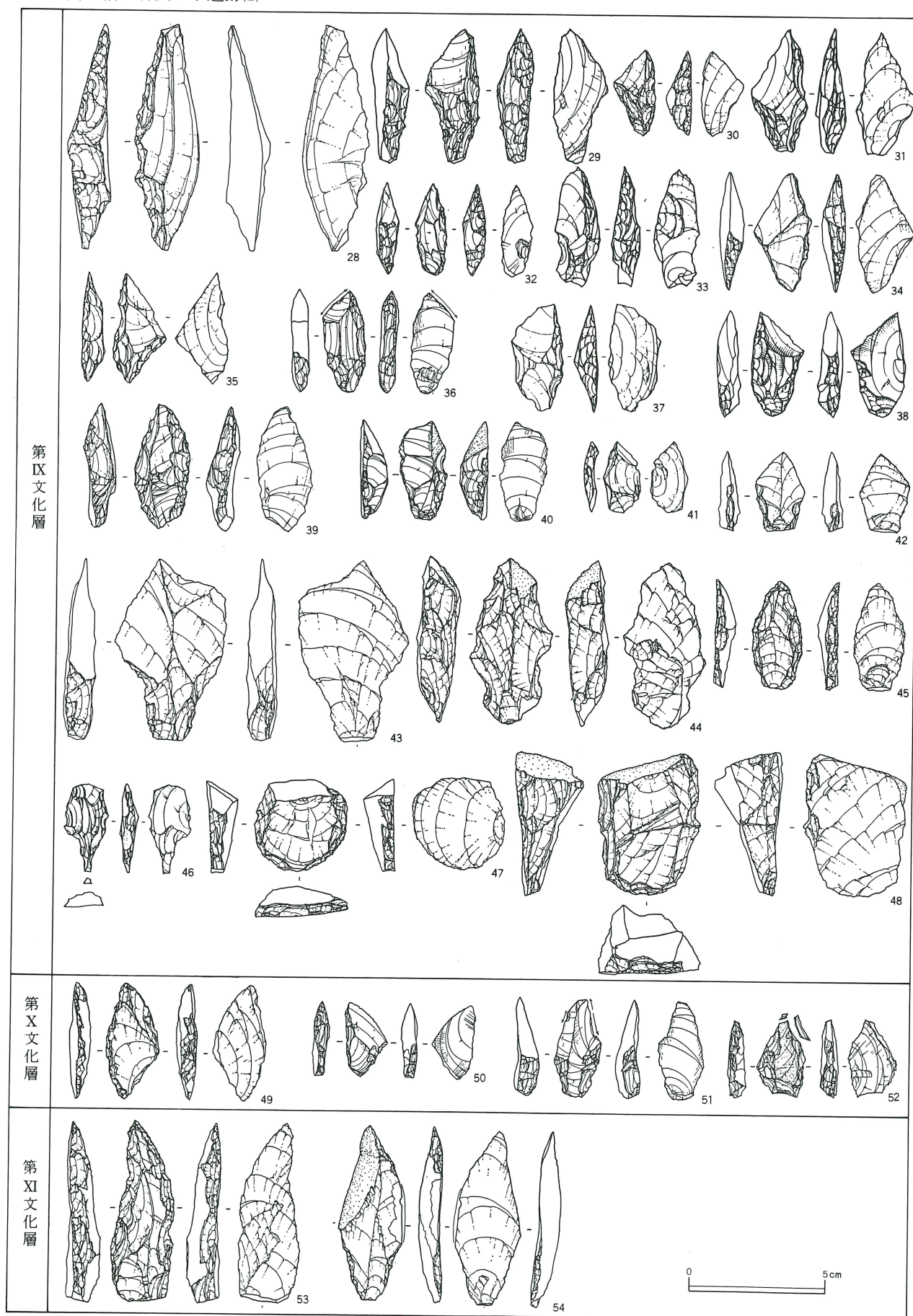
第Ⅸ文化層は、B2L 中部から検出されている。本文化層は長ヲサ遺跡で最も資料が充実しており、第Ⅱ調査区の全体に分布し、石器総数約3000点を数え、礫群25箇所を伴っている。石器の組成は、ナイフ形石器約100点（切出形石器を含む）を主に、尖頭器、角錐状石器、彫器、搔・削器等である。

ナイフ形石器は国府型ナイフ形石器1点(28)を含め、

第323図 柏ヶ谷長ヲサ遺跡(1)



第324図 柏ヶ谷長ヲサ遺跡(2)



主に厚手の横長剥片を素材に、両側縁に鋸歯状の調整加工が施された、第VIII文化層の(14~17)と近似したもの(29~35)と、縦長、横広剥片と素材をあまり限定せず調整加工を両側縁に施し、刃部が幅狭で器軸に対し直角に近く切出形石器として分離できる(36~41)。縦長剥片を用いて、基端面に打面を残し、調整加工が基端周辺にのみ施されるもの(42~43)に分けられる。

角錐状石器は大形で作りの粗い(44)と、縦長剥片を素材として基端に打面を残し、周辺に調整加工を施した(45)がある。搔器は外形が円盤状に近い円刃の(47)、長方形の端部に直線的な刃部をもった(48)等、定形的なものが見られる。石器石材は、黒耀石、凝灰岩、安山岩が主に用いられている。

第X文化層は、B2L上面から検出された。石器及び礫の分布は、広い範囲に散漫である。器種組成はナイフ形石器(切出形石器を含む)、小形の角錐状石器(52)、搔・削器等で、石器石材に黒耀石、玄武岩が用いられている。

第XI文化層は、B2L下底からL3の上部にかけて検出されている。石器点数は少ないようであるが、報告者の一人、諏訪間氏がAT降灰層との関連でaとbに分離した微妙な石器群である。ここに提示したものは、第XI a文化層とした凝灰岩製のナイフ形石器と、玄武岩製の角錐状石器とした石器である。ナイフ形石器は縦長剥片を素材に、基端部周辺と先端付近に調整加工を施したもので、嘉留多遺跡第3文化層のナイフ形石器(15)との関連が注目される。

以上、長ヲサ遺跡の状況を概観した。正式報告が未刊のため、ここに示した文化層がはたして、時間軸上に整然と並ぶのか、幾つかの文化層が平行する可能性があるのかについては、今後の検討に期待するが、該期の石器群が最も細分される可能性を示す、良好な資料であることは間違いない。

b) 湘南藤沢キャンパス内遺跡(第325図)

神奈川県藤沢市に所在する。遺跡は相模野台地の南部の小出川の西岸で、標高は30~40m前後である。

調査は慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスの建設に伴

うもので、面積は約330,000m²と広大である。先土器時代の遺物は、6枚の文化層から約4,000点の石器が検出されている。その内、該期の対象資料は、AT層上位の第VI文化層と、AT層を挟んで上下から検出された第V・IV文化層の3枚である。

第IV文化層は、L2層下半部からB2U層全体にかけて検出された。遺物の出土状況は、調査区の広範囲にわたっており、礫群と重複している。石器の総数は606点で、礫の総数は807点である。石器は切出形石器(報告書ではナイフ形石器と分類)と、角錐状石器、搔器等が見られる。石器石材は黒耀石を主体に、ガラス質黒色安山岩が用いられる。

切出形石器は、厚手横広の剥片を素材にして、両側縁に急角度の鋸歯状加工を施し、刃部が器軸に対し直角方向に近く、幅狭のことが多い。角錐状石器は切出形石器と同じ厚手横広の剥片を素材とし、粗い調整加工が施される。搔・削器は破損品が多く、完形の7は第V文化層のものと比べて縦長である。

第V文化層は、AT層上位のB2層から検出された。石器の総数が2032点と多く、本遺跡の中心的文化層である。遺物の出土状況は良好で、石器集中が17箇所検出されている。剥片石器に用いられている石器石材は、黒耀石が主体を占めている。

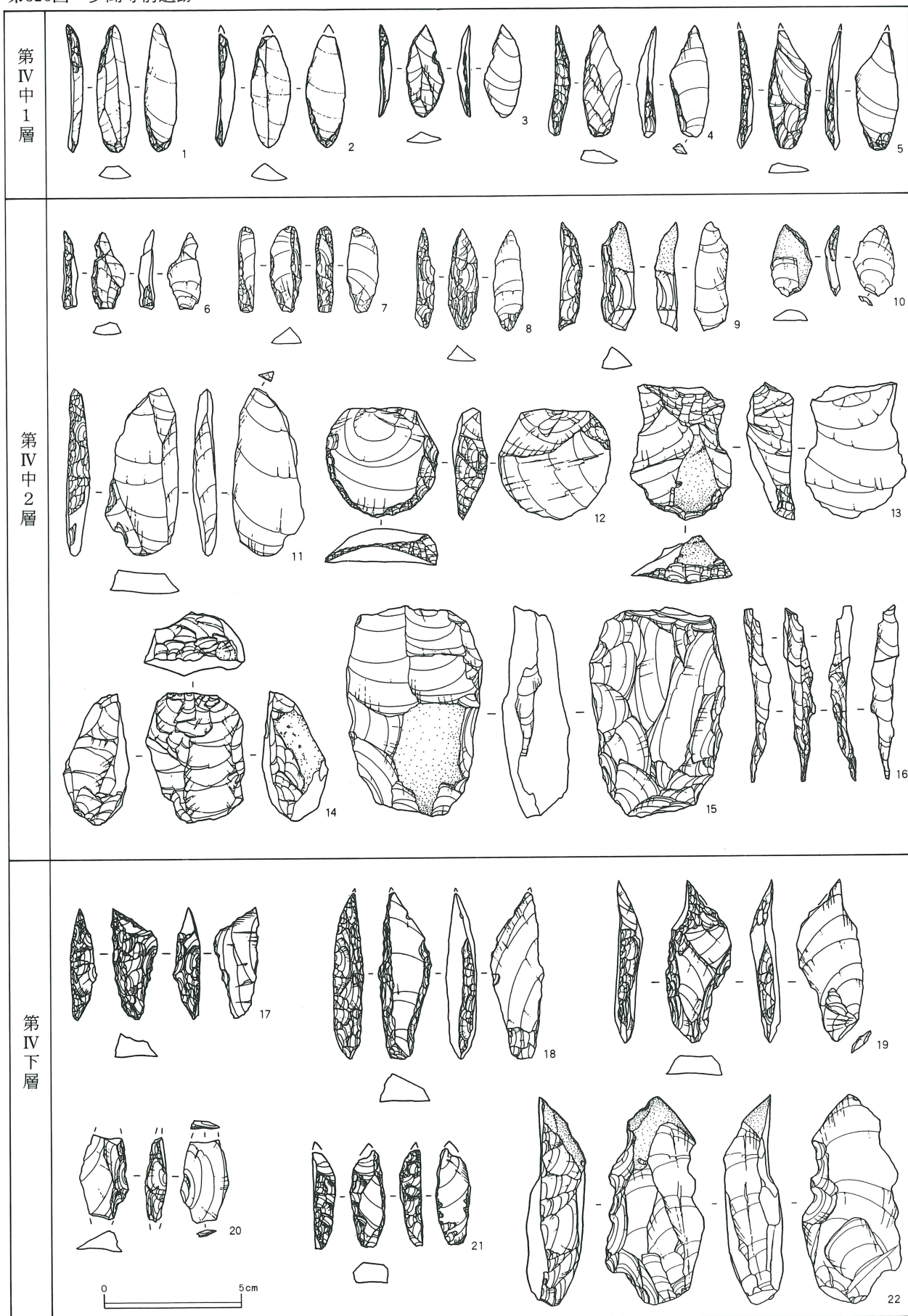
石器の内訳は、ナイフ形石器37点と搔器20点が主体をなし、楔形石器7点と彫器1点を含む。ナイフ形石器は、縦長剥片を素材に、一側縁または二側縁に調整加工を施したものが多く、寺尾期のナイフ形石器と共通する要素も多いが、剥片素材は厚手である。搔器は整った円形搔器または刃部が円刃になるものが多く、本文化層の基本組成をなしている。

第VI文化層は、L3層(AT層)下位より検出された。第V文化層と比較して、石器の総数は20点と少なく、出土状況は散発的で、製品を含む石器集中はみられない。ナイフ形石器は3点出土したが、ガラス質黒色安山岩製の単独、黒耀石製の2点が近接して検出されている。

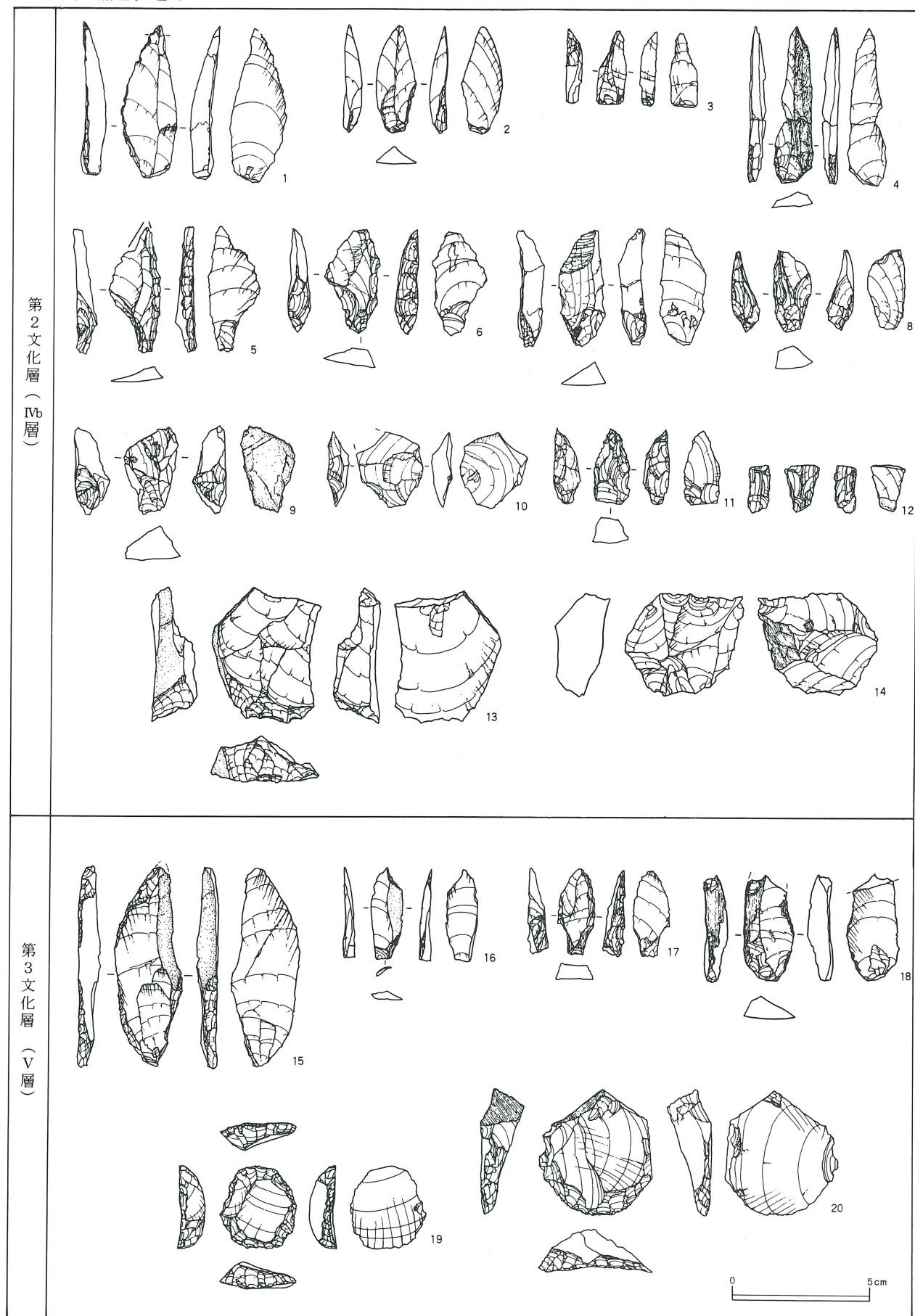
第325図 湘南藤沢キャンパス内遺跡



第326図 多聞寺前遺跡



第327图 嘉留多遺跡



c) 多聞寺前遺跡 (第326図)

東京都東久留米市に所在する。遺跡は武蔵野台地の中央部、黒目川流域の武蔵野面に位置し、標高は約51mである。

先土器時代の遺物は、第Ⅲ層～第Ⅹ層にかけて検出され、文化層は5枚確認された。該期に関連する資料は、第Ⅳ層中部と第Ⅳ層下部の文化層である。

第Ⅳ層中部は、自然層位での区分は難しいが、石器集中によって、よりⅣ上的な石器群とよりⅣ下的な石器群が認められ、前者をⅣ中1、後者をⅣ中2としている。Ⅳ中1石器群は、典型的な砂川期のナイフ形石器を主体にしているのに対し、Ⅳ中2石器群は岩宿Ⅱ期の細分に関わる資料であると考えられる。

石器は、ナイフ形石器と搔・削器等が検出されている。ナイフ形石器は、縦長剥片を素材とし側刃縁及び背縁に調整加工を施した(6)や、稜付石刃を素材にしたと思われる(8)等である。円刃搔器は長軸の一端に厚手の刃部を作る特徴的なもの(12・13)が見られる。石核は作業面を正面に限定した単設のもの(14)や、両面に石核の整形加工を施し、扁平となる(15)が見られる。また、(15)は右側面に剥片(16)が接合しており、小口から縦長剥片を剥片剥離する、織笠氏が剥片剥離工程8類と分類した石核のブランクになるものと思われる。

Ⅳ層下部は、40点検出されているが、製品のほとんどが単独出土である。石器は大形の切出形石器に厚手の搔・削器等が含まれる、典型的な岩宿Ⅱ期の石器群である。

d) 嘉留多遺跡 (第327図)

東京都世田谷区に所在する。遺跡は武蔵野台地の南東部、仙川と野川に挟まれた部分で武蔵野面に位置し、標高約38mである。

先土器時代の資料は、第Ⅲ層～第Ⅹa層にかけて5枚の文化層が認められた。内、第2文化層が第Ⅳb層、第3文化層が第Ⅴ層で、該期の対象資料である。

第2文化層は、石器総数が474点で、ナイフ形石器17点と、角錐状石器2点と纏まっている。ナイフ形石器

は縦長剥片を素材に、基端に打面を残し基部周辺に調整加工を施した(1～4)。二側縁に Blunting 状の調整加工が施された(4・6)等が見られる。切出形石器は両側縁から急角度の調整加工が施された、小形厚手で幅狭の刃部となる(8)。角錐状石器は、小形の(11)と上半部を欠損した(12)が見られる。搔器は長軸の一端に厚手の刃部を有するもので作りは粗い。

第3文化層は、石器数が108点で、ナイフ形石器6点と円形搔器や円刃の搔器を特徴的に含む。ナイフ形石器は、縦長剥片を素材に基端周辺と先端付近に調整加工が施された(15・16・18)、二側縁に調整加工が施される(17)が見られた。

e) 花沢東遺跡 (第328図)

東京都国分寺市に所在する。遺跡は武蔵野台地の西南縁の武蔵野面に位置し、標高は約72mである。

先土器時代の資料は、第Ⅲ層～第Ⅸ層にかけて7枚の文化層が認められた。内、第3文化層の第Ⅳb層と第4文化層の第Ⅴ層が、該期の対象資料である。

第3文化層は、横広剥片を素材に、横位に用いた小形のナイフ形石器、切出形石器が卓越している。角錐状石器は器長が短く、幅広厚手のものが見られる。石核は賽子状である。

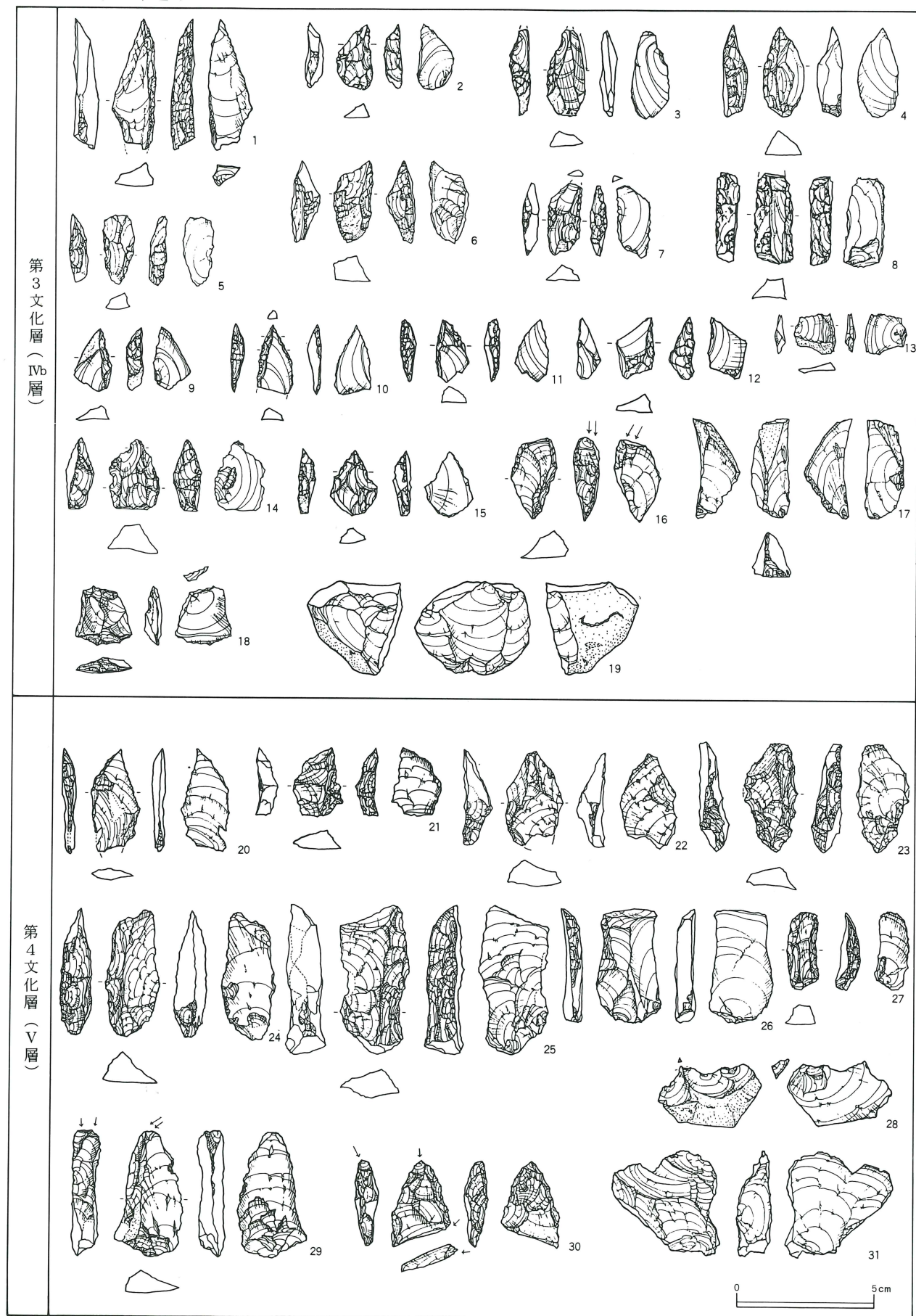
第4文化層は、剥片石器の素材は縦長剥片が用いられており、切出形石器の多くは打面を基端に残すものが目に付く。ナイフ形石器、切出形石器以外に彫器、錐器が器種組成に含まれる。石核は厚手剥片を用いた盤状石核が見られる。

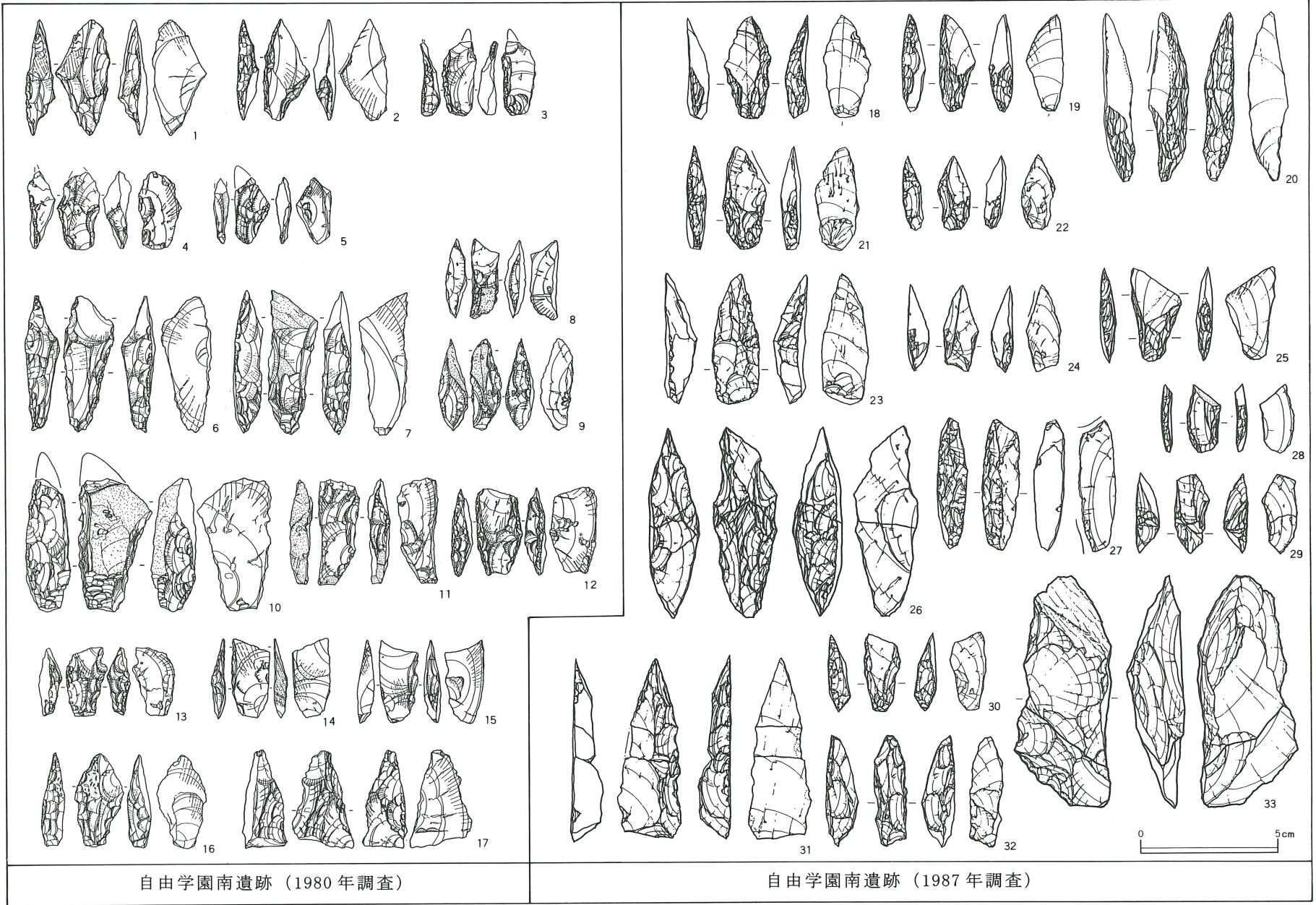
f) 自由学園南遺跡 (第329図)

東京都東久留米市に所在する。遺跡は武蔵野台地の中央部、黒目川流域に位置し、標高は約56mである。学史的に縄文時代の遺跡として著名で、先土器時代の資料は、1980年と1987年の発掘調査で良好な石器群が検出されている。2回の調査区は、100m程度の距離に設定されているが、検出された石器群は、共に該期の範疇に含まれると考えられる。

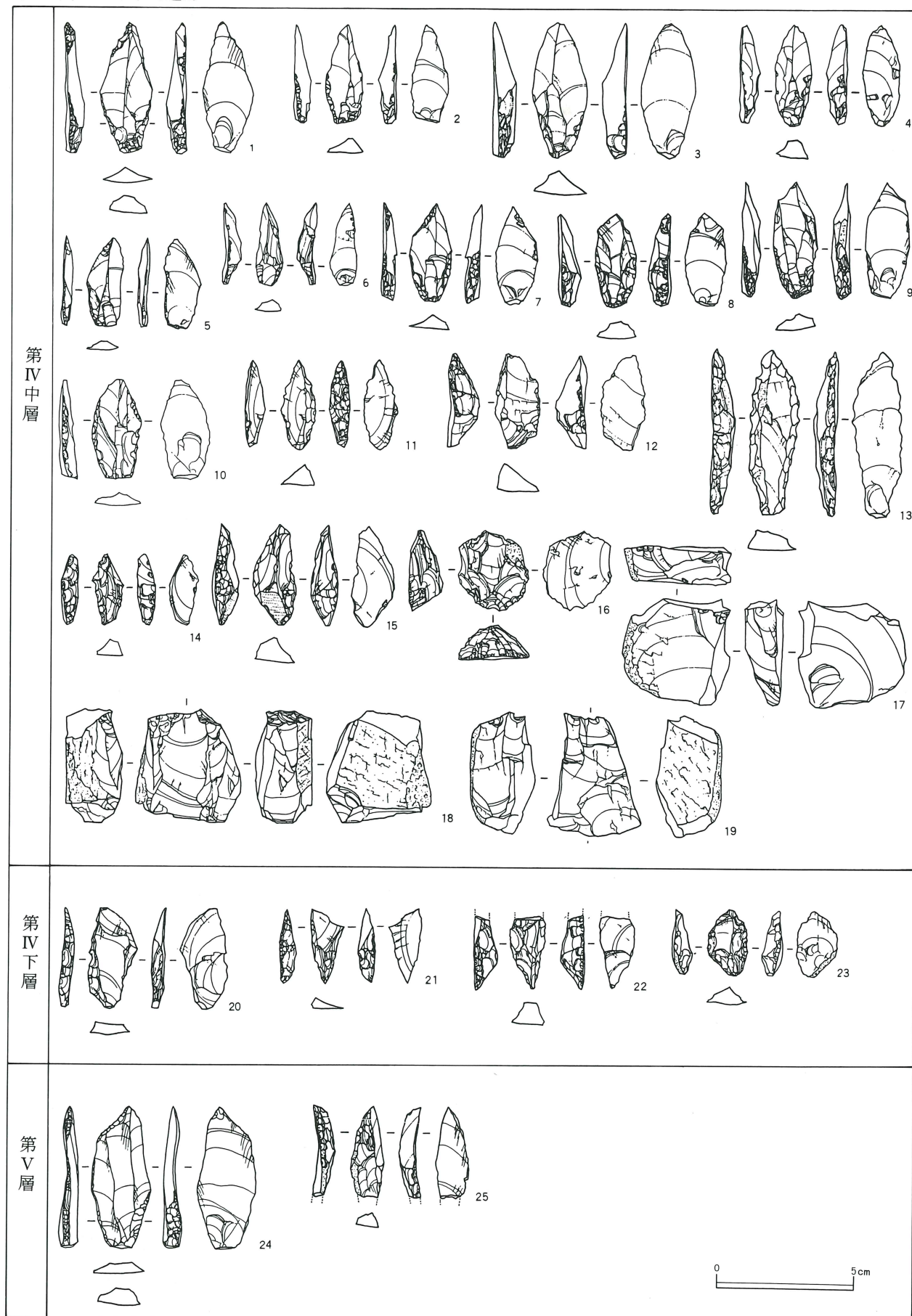
1980年調査では、ナイフ形石器(報告書では、ナイフ形石器、台形石器、台形様石器、切出形石器に細分

第328図 花沢東遺跡





第330図 はけうえ遺跡



されている)は、多くが横広剥片を横に用いられている。(1~5)は先端が尖り、刃縁の長さが比較的長い。(6~15)は刃縁が幅狭で、器軸対し直角に近く、器厚が特に厚い感じを受ける。後者を切出形石器として前者と分けて考えたい。

角錐状石器は縦長剥片を素材とするもの(16)、横広の剥片を素材に用いたもの(17)が見られる。

石器石材は、黒耀石を主体に玄武岩、チャート等が用いられている。

1987年調査では、ナイフ形石器は、縦長剥片を素材とするもの(18~24)と、横広剥片を素材とし、器軸に直角に近い幅狭の刃部を有するもの(25~30)の二つに、大きく分けることができる。前者は基端に打面を残し、鋸歯状の調整加工を二側縁に施している。後者を切出形石器と考えておく。(26)は報告書で角錐状石器の未成品としているが、接合の状況を見ると、先端の幅狭の刃部を意識して残していることが窺えることから、切出形石器と考えられる。

角錐状石器は、下半部を欠損した外形が三角形をした大形の(31)と、両側縁が平行する棒の外形をした(32)がある。また、(33)は石斧とされている。

剥片石器類の石材には黒耀石、チャート、安山岩が多用され、石斧にはホルンフェルスが使われる。

g) はけうえ遺跡(第330図)

東京都国分寺市に所在する。遺跡は武蔵野台地の武蔵野面に位置し、標高は高いところで72m、斜面下が60mである。先土器時代の遺物は、III層上面からX層にかけて、11枚の文化層が認められた。内、第IV中層文化と第IV下層文化、第V層文化が、該期の対象資料である。

第IV中層文化は、石器・礫集中部が16箇所認められ、石器533点が検出されている。石器に用いられている石材は、黒耀石とチャートが主体である。器種組成は、報告書でナイフ形石器26点、ゴロゴロ石器2点、尖頭器2点、スクレイパー5点となっている。しかし、実測図を見ると、尖頭器とした2点は不明であるが、ゴロゴロ石器2点とナイフ形石器1点の、(13~15)は

角錐状石器に分類できると思われる。

ナイフ形石器は、縦長剥片を下位に用いて、打面を基端に残す、基部加工のものが主体を占めるが、横長剥片を用いた(11)のようなナイフ形石器も見られる。搔・削器は(16)のような、刃部の厚い円刃搔器が特徴的である。石核は(17~19)のように、厚手の剥片等の小口から縦長剥片を剥離するものが特徴的である。

第IV下層文化は、石器点数は218点と第IV中層文化の半分に減少するが、礫点数は僅かに増大している。剥片石器に使われた石材は、黒耀石とチャートが主体を占めている。石器の組成は、ナイフ形石器(切出形石器)6点、ゴロゴロ石器(角錐状石器)2点、搔・削器等である。切出形石器は横広剥片を素材に、両側縁に粗い調整加工を施したもので、刃部は器軸に対し直角方向に近く、幅狭である。角錐状石器は厚手の縦長剥片が用いられ、粗い調整加工が施されている。

第V層文化は、石器の数が153点、礫の数が831点である。礫群は数が急増し、個々の規模は縮小する傾向にある。石材は第IV下層文化と同じく黒耀石とチャートを主体とする。定形的石器はナイフ形石器3点のみで、他は剥片の一部に刃部加工を施した搔・削器である。ナイフ形石器は、縦長剥片を素材に、基部と先端の一部に調整加工を施すものが見られる。

h) 提灯木山遺跡(第331図)

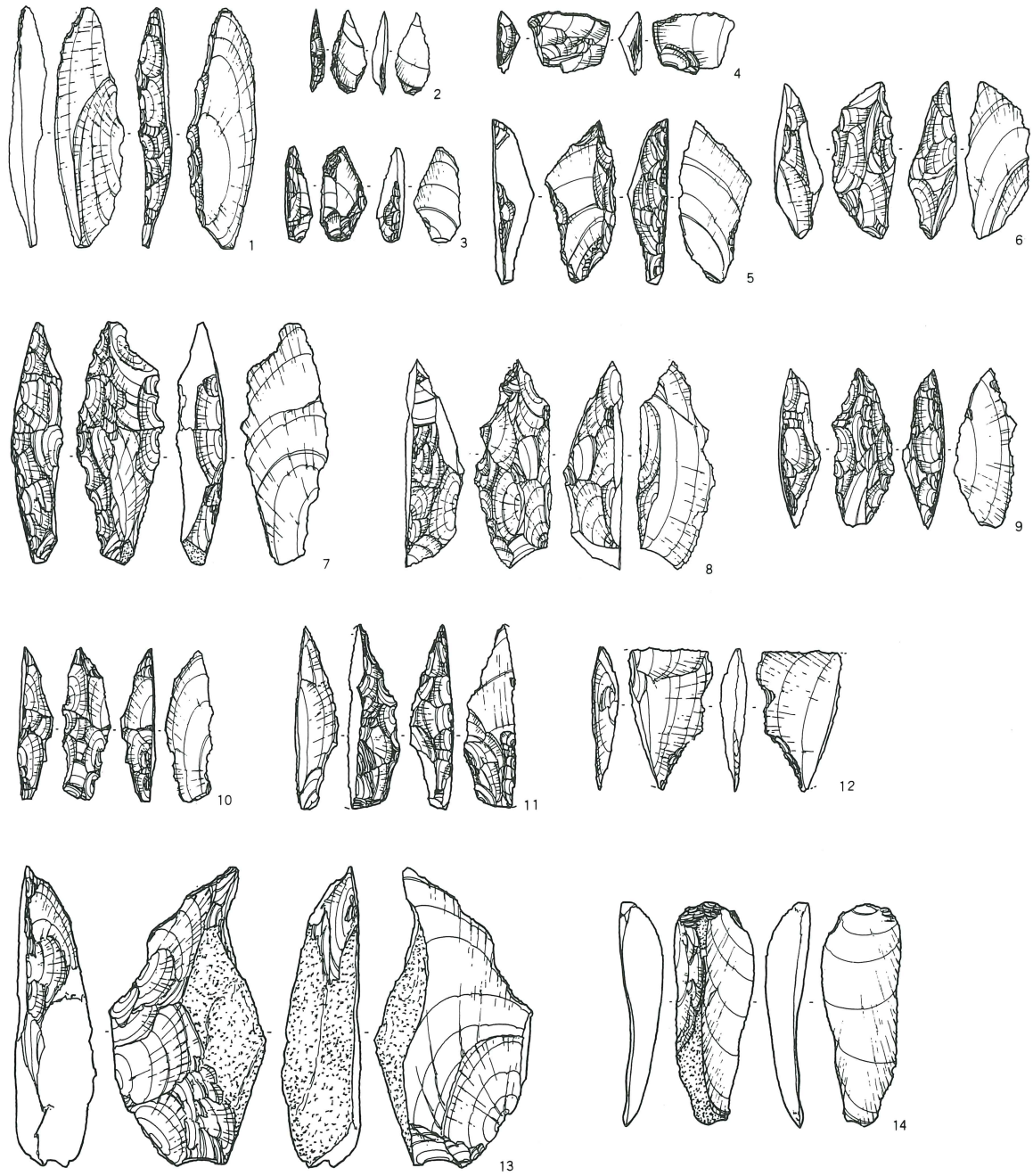
埼玉県の桶川市と北本市の境に位置する。遺跡は大宮台地の北部で、標高は約22mである。先土器時代の石器は、ハードローム層中から2枚の文化層が確認された。

第2文化層は、石器集中4箇所と礫群5箇所が検出された。石器は国府型ナイフ形石器(1)、縦長剥片を素材とした小形のナイフ形石器(2・3)、切出形石器(5・6)、大形の角錐状石器(8~11)等が出土している。また、整った縦長剥片が目につく点も、特徴的である。大宮台地で大形の角錐状石器が纏まって検出された、最初の遺跡である。本文化層と対比できる石器群は、浦和市の中原後遺跡が挙げられる。

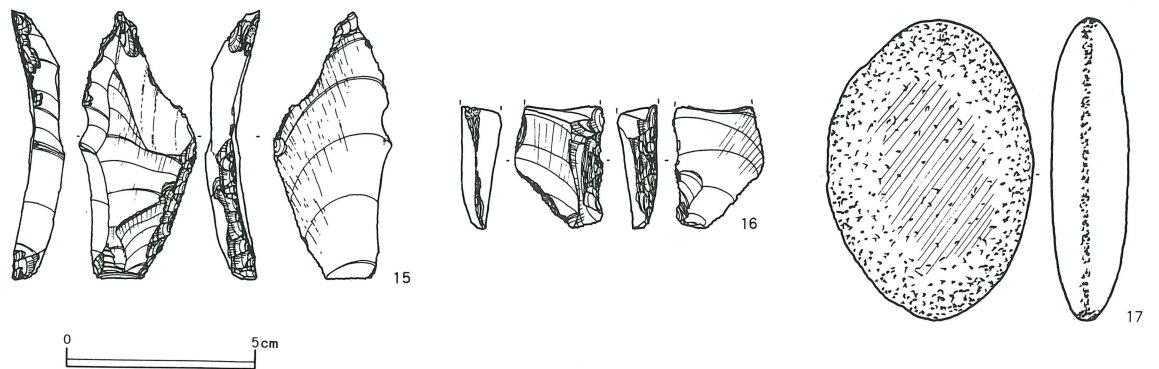
第3文化層は、石器点数が6点と少ない資料である

第331図 提灯木山遺跡

第2文化層



第3文化層



が、大宮台地で該期資料が文化層として分離できた、貴重な例である。石器は(15)のナイフ形石器が黒耀石の縦長剥片を素材に、側刃縁と先端付近に調整加工が施されている。(16)の搔・削器は上半部を欠損するが、右側縁に刃部加工を施したものである。また、扁平の磨石(17)が見られる。

第2文化層はガラス質黒色安山岩等、複数の石材が用いられ、黒耀石はほとんど使われていない。一方、第3文化層は、資料数が少ないが剥片石器は黒耀石が使われている。

i) 若葉台遺跡(第332図)

千葉県流山市に所在する。遺跡は下総台地の北東部に位置し、現在の江戸川を挟んで大宮台地と対峙する。標高は約17mである。先土器時代の資料は、調査区の中央部、約220mの範囲から石器集中7箇所が検出された。各石器集中の検出された層位から、第6ブロック→第3ブロック→第1・5ブロックの変遷が指摘され、第6ブロックがAT直後、第3ブロックがV層、第5ブロックがIV下層に対比されている。

第1・5号ブロックは、ハードローム最上部から検出されている。石器は第5号ブロックが多く、第1号ブロックから出土したのは、4と7だけである。ナイフ形石器と分類されているのは、二側縁加工で先端が尖り、刃縁の比較的長い(1~4)と、両側縁に加工が施され、先端が器軸に対し直角方向に近く、刃縁が幅狭になるもの(7・8)の2つに大別できる。剥片素材は、ともに横広剥片と縦長剥片が用いられている。調整加工は前者がBlunting状のものが多く、後者は鋸歯状の粗い剥離である。前者をナイフ形石器、後者を切出形石器として捉えておく。

角錐状石器(報告書では尖頭器と分類されている)(9)は、下半部の欠損する。搔・削器はあまり定形的なものは見られない。

剥片石器は黒耀石、流紋岩、砂岩、安山岩等多様な石材が用いられている。

第3号ブロックは、第1黒色帯の上部から検出されている。ナイフ形石器は、横広剥片と縦長剥片を資材

に、両側縁に器厚いっぱいの調整剥離が施されている。外形は、側刃縁が僅かに内湾しているのが特徴的である。(15)は石核と記載されている。石器石材は、ほとんどが頁岩である。

第6ブロックは、ハードローム最上部から第1黒色帯の下部にかけて検出されている。石器は総数50点程度でナイフ形石器14点を含んでいる。ナイフ形石器は縦長剥片を素材に、二側縁に通常のBluntingが施されている。石器石材は、黒耀石がほとんどである。

j) 白幡前遺跡(第333図)

千葉県八千代市に所在する。遺跡は下総台地の東部に位置し、標高は15~25mである。本遺跡は萱田地区区画整理事業に伴う発掘調査の一角で、井戸向、坊山、北海道、ヲサル山、権現後遺跡と接している。

該期(白幡遺跡では第2文化層)は、萱田地区の先土器時代資料が最も充実している段階で、各遺跡で多数の石器集中が検出されている。本遺跡では調査区の広範な調査区から18箇所の石器集中が検出された。しかし、土層の堆積が薄いため、V層とIV下層の自然層位で石器群を分けるのは、各遺跡や各遺跡間において難しい現状であった。そのような状況下、白幡遺跡S30地点の遺物出土層準がV層(第1黒色帯)で、S29地点との層位差が認められ、本文化層中で古い部分を構成する地点であるとの調査所見は、重要である。

S30地点の石器は、基部の長い切出形石器(6)を特徴的に、横広剥片を素材とする切出形石器、調整加工の粗い角錐状石器(10・11)、刃部が厚く円刃となる搔器(12・13)が見られる。石材はガラス質黒色安山岩を主体に、黒耀石、珪化凝灰岩、チャート等が用いられる。

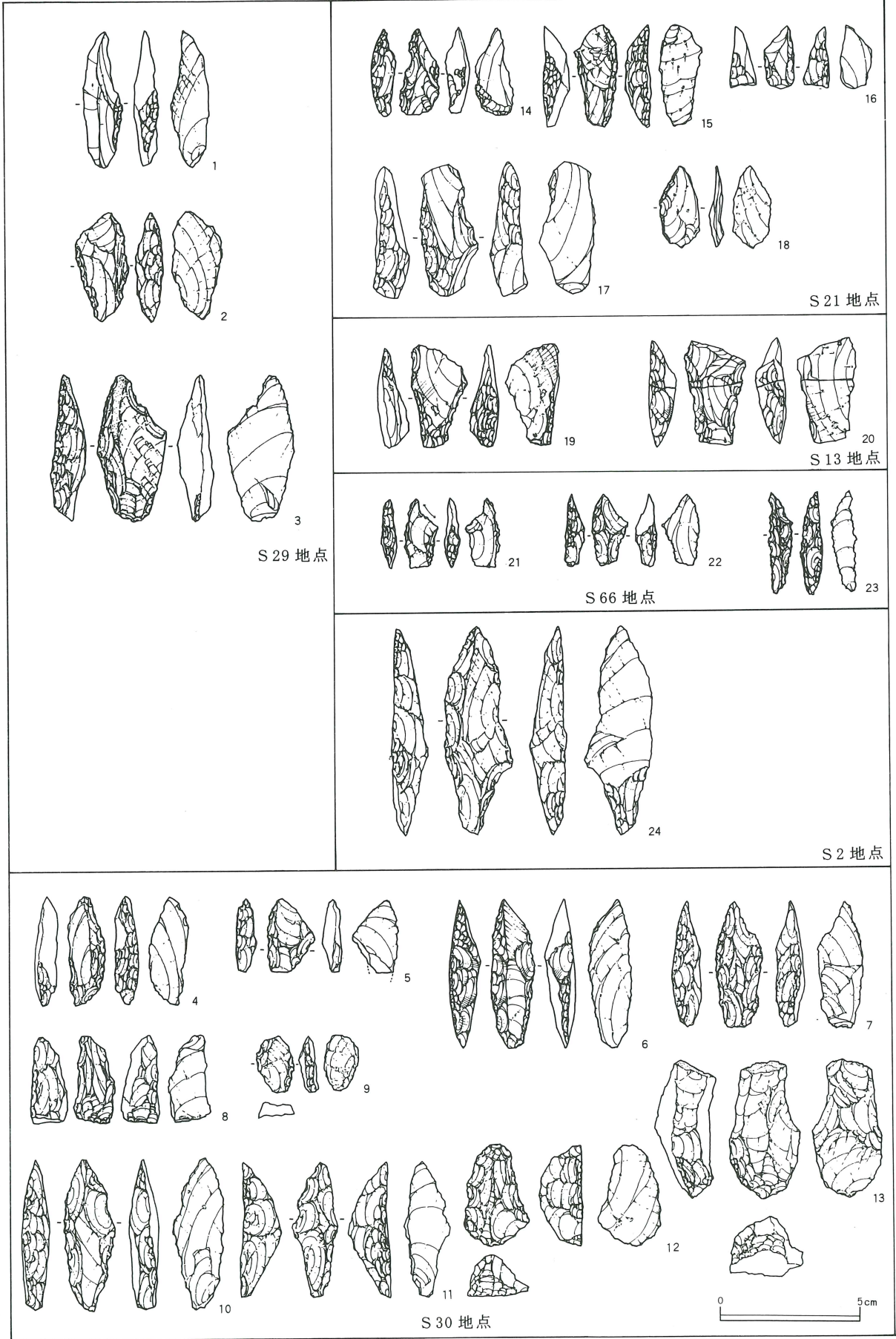
一方、層位差が明らかとされているS29地点の石器は、資料総数337点と纏まっているが、製品は少なく、縦長剥片を素材としたナイフ形石器(1・3)と、横広剥片を素材とした切出形石器(2)等が見られるだけである。石材はガラス質黒色安山岩(報告書では黒色緻密安山岩)が主に用いられ、黒耀石等が含まれている。

比較資料として、S2・S13・S21・S60地点の石器

第332図 若葉台遺跡



第333図 白幡前遺跡



を掲載した。S 21地点は横広剥片、縦長剥片を素材としたナイフ形石器(14)、切出形石器(15・17)等が検出されている。石器石材は黒耀石、チャート、ガラス質黒色安山岩が用いられている。

S 13地点は、台形状に近い切出形石器が出土している。石材は全て黒耀石が用いられている。

S 60地点では、小形で精巧な作りの角錐状石器(23)が出土している。石材はガラス質黒色安山岩と黒色頁岩が主に用いられている。

S 2地点は、調整加工の粗い大形のナイフ形石器(角錐状石器の様にも見えるが)が出土している。石器石材は、黒色頁岩を主に、ガラス質黒色安山岩、黒耀石が用いられている。

以上、各石器集中を検討したが、第2文化層全体で用いられている石器石材は、黒耀石とガラス質黒色安山岩、黒色頁岩が特徴的である。

2) 細分試論

該期の細分案は、織笠昭氏によって殿山技法と国府型ナイフ形石器の問題から、相模野第III期を前半と後半に分けて整理した。その後、伊藤氏は該期をV中亜段階、V上亜段階、IV下亜段階、IV中亜段階の4つの亜段階の細分案を提示している。亀田氏は同じく該期を4期に細分し、礫群等を含め各期の遺跡構造の分析を行ったが、伊藤氏との間で、各段階(期)で取り上げられている遺跡が異なる場合がみられる。

ここでは、該期の複数の文化層が確認された遺跡を中心に、その文化層の前後関係から細分を試みた。結果として、2期4段階の石器群の変遷が考えられた。各期はタイプサイトとなる遺跡名で呼称した。

【殿山期】

埼玉県殿山遺跡の資料をもって呼称する。寺尾期(寺尾遺跡第6文化層：鈴木遺跡第VI層)と岩宿II期の中間に当たる。殿山遺跡の層位的所見では、編年的位置が必ずしも確かでないが、長ヲサ遺跡、提灯木山遺跡の文化層の認識から、岩宿II期の下層の石器群として捉えることができる。また、湘南藤沢キャンパス内遺

跡第V文化層の資料は、その編年的位置づけに問題が多いが、AT降灰層を挟んで第VI文化層と分離できる点と、特徴的な搔器を組成する点を加味し、殿山遺跡のナイフ形石器と異なる点も多いが、本期に含めて捉えたい。

本期の石器組成は、縦長剥片を素材としたナイフ形石器、円形搔器、円刃搔器、磨石を主体としている。殿山遺跡は、国府型ナイフ形石器、大形の切出形石器が含まれ、新しい様相と見ることもできる。

【岩宿II期】

群馬県岩宿遺跡の第II石器文化層の石器群をもって呼称する。該期の石器組成は、切出形石器と角錐状石器が卓越し、剥片剥離の技術は、横長(横広)剥片が組織的に作出されている。

花沢東遺跡の第3・4文化層、長ヲサ遺跡の第VIII・IX文化層等の文化層の認識から、3つの段階に細分が可能である。

【1段階】

代表的な遺跡および文化層は、相模野台地では、長ヲサ遺跡第IX文化層、上草柳第2地点第II文化層。武蔵野台地では、花沢東遺跡第4文化層、自由学園南遺跡。大宮台地では、提灯木山遺跡第2文化層、中原後遺跡。下総台地では白幡前遺跡第2文化層S 30地点が挙げられる。

石器は、厚手縦長の切出形石器と大形の角錐状石器が目につく。また、角錐状石器は大形と小形のものを組成する場合がある。国府型ナイフ形石器の多くは、本段階の遺跡(文化層)から検出されている。

自由学園南遺跡は、調査区が少し離れて1980年と1987年に発掘調査が行われた。検出された石器群の様相が異なっている。石器群の内容から、2地点とも1段階の幅で捉えるが、1987年→1980年の時間差が想定できる。

【2段階】

代表的な遺跡および文化層は、相模野台地は、長ヲサ遺跡第VIII文化層、湘南藤沢キャンパス内遺跡第IV文化層。武蔵野台地は、花沢東遺跡第3文化層、前原遺

跡第IVM2層。大宮台地は、新屋敷遺跡C区、大和田高明遺跡、明花向遺跡C区。下総台地は、若葉台遺跡第3ブロック、若葉台遺跡第5ブロック、白幡前遺跡第2文化層S29地点等が挙げられる。若葉台遺跡の第3ブロックと第5ブロックで層位差が認められているが、報告書で石器群の内容を見る限り、両石器群ともに本段階の中におさまる差と考えられる。

石器は、切出形石器が小形になり、台形状になるものが多い。角錐状石器も小形のものが主体になり、1段階の様に大形と小形が組成することは無い。

【3段階】

岩宿II期を切出形石器が卓越する時期として捉え、と、本段階は岩宿II期の細分で考えるのか、新しい時期を設定すべきか問題であるが。当面、資料の充実と、

砂川期への変遷過程を検討する事にする。

代表的な遺跡および文化層は、武蔵野台地に集中している。野川中洲北遺跡第IV中～下層、嘉留多遺跡第2文化層、多聞寺前遺跡第IV中2層等が挙げられる。

ナイフ形石器は、縦長剥片を素材に基部周辺に調整加工を施したことが多い。また、多聞寺前遺跡第IV中2文化層と嘉留多遺跡第2文化層のナイフ形石器は、二側縁加工で、側刃縁が僅かに内湾するものがみられ、次の砂川期のナイフ形石器に繋がる要素かもしれない。角錐状石器は2段階のものと同じく、小形のものが組成している。

剥片剥離は、小口から縦長剥片を作出する石核が新しく加わる。

<註>

註1：明花向遺跡C区の編年的位置付けについて、橋本勝雄氏から多くの教示を受けた。また、若葉台遺跡等、千葉県内の資料との比較が重要であると指摘を受けた。

	相模野台地	武蔵野台地	大宮台地	下総台地
殿山期 (V層)	藤沢校地V文 長ヲサX I文	嘉留多第3	提灯木山3文 殿山遺跡	
岩宿II期 1段階： IV下層(1)	長ヲサX文？ 長ヲサIV文 上草柳2地点II文	丸山東IV B6 自由学園南(1991) 自由学園南(1983) 花沢東4文 西ノ台BIVL 前原IVL 東早淵5文 多摩蘭坂3文 多聞寺前IV下	天沼 提灯木山2文 中三谷 中原後	白幡前S30地点
2段階： IV下層(2)	長ヲサVIII文 長ヲサVII文 藤沢校地IV文	花沢東第3 前原IVM2	松木7区 大和田高明 新屋敷C区 明花向C区 赤山2文	若葉台第3ブロック 若葉台第5ブロック 白幡前S29地点
3段階： IV下～中層	長ヲサVI文？	野川中洲 IV中～下層 嘉留多2文 多聞寺前IV中2 野川L15		

<引用・参考文献>

- 阿部祥人他 1980 『はけうえ』 国際基督教大学考古学研究センター
- 伊藤恒彦 1983 『自由学園南遺跡』 自由学園
- 伊藤 健 1991 a 「ナイフ形石器文化の画期と変容」『物質文化』第54号 p1~14
- 伊藤 健 1991 b 「ナイフ形石器の変異と変遷」『研究論集』X 東京都埋蔵文化財センター p81~107
- 伊藤 健 1991 c 「ナイフ形石器研究の視点と定点」『東海史学』第26号 p1~31
- 大野康男・田村隆 1991 『八千代市白幡前遺跡―萱田地区埋蔵文化財調査報告書V』 千葉県文化財センター調査報告 第188集
- 織笠明子 1982 「切出形石器」『シンポジウム南関東を中心としたナイフ形石器文化の諸問題<資料>』 神奈川考古同人会 p101~105
- 織笠 昭 1982 「剥片剥離工程」『シンポジウム南関東を中心としたナイフ形石器文化の諸問題<資料>』 神奈川考古同人会 p101~105
- 織笠 昭 1987 a 「殿山技法と国府型ナイフ形石器」『考古学雑誌』第72巻第4号 p1~38
- 織笠 昭 1987 b 「国府型ナイフ形石器の形態と技術（上）」『古代文化』第39巻第10号 p8~31
- 織笠 昭 1987 c 「国府型ナイフ形石器の形態と技術（下）」『古代文化』第39巻第12号 p15~30
- 織笠 昭 1988 「角錐状石器の形態と技術」『東海史学』東海大学史学会 第22号 p1~48
- 亀田直美 1995 「武蔵野台地V層IV層下部段階における遺跡構造」『古代探叢』IV 早稲田大学出版部 p1~16
- 窪田恵一他 1995 『丸山東遺跡I』 東京外かく環状道路練馬地区遺跡調査会
- 栗島義明 1983 『多聞寺前遺跡II』 多聞寺前遺跡調査会
- 鴻巣市 1989 『鴻巣市史 資料編1 考古』 鴻巣市史編さん調査会
- 小林恵子 他 1984 『花沢東遺跡』 恋ヶ窪遺跡調査会
- 佐藤達夫 1969 「ナイフ形石器の編年的一考察」『東京国立博物館紀要』5 p23~76
- 佐藤達夫 1970 「長野県野辺山B5地点の石器―ナイフ形石器の編年に関する覚書」『信濃』22巻4号 p1~6
- 諏訪間順 他 1983 『先土器時代 海老名市柏ヶ谷長ヲサ遺跡発掘調査概要報告書』 柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団
- 諏訪間順 1988 「相模野台地における先土器時代石器群について」『神奈川考古』第24号 p1~30
- 諏訪間順 1991 「AT 降灰の石器文化に与えた影響」『立正史学』第69号 p41~64
- 諏訪間順 1995 「柏ヶ谷長ヲサ遺跡」『第3回 石器文化研究交流会―発表要旨―』 石器文化研究会 p45~52
- 関根唯巳・五十嵐彰 1992 『湘南藤沢キャンパス内遺跡 第2巻 岩宿時代』 慶應義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室
- 高杉尚宏他 1982 『嘉留多遺跡・砧中学校7号墳』 世田谷区遺跡調査会
- 田代 治 1992 『大和田高明遺跡』 大宮市遺跡調査会報告 第38集
- 田中英司 1984 『明花向・明花上ノ台・井沼方馬堤・とうのこし』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第35集
- 田中英司 1987 「埼玉県の石器と北海道の石器」『埼玉の考古学』 柳田敏司先生還暦記念論集 p13~27
- 田村 隆 1986 『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書V―谷・上貝塚・若葉台・塚(1)・(2)・馬土手(1)・(2)・(3)』 千葉県文化財センター
- 田村 隆他 1987 『研究紀要』11 千葉県文化財センター
- 千葉 寛他 1989 『野川中洲北遺跡』 小金井市遺跡調査会
- 西井幸雄 1990 『提灯木山遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第92集
- 西川 宏・杉野文一 1959 「岡山県玉野市宮田山西地点の石器」『古代吉備』第3集 p1~9
- 萩谷千明 他 1991 『自由学園南遺跡』 東久留米市教育委員会